

# グローバル化へ インドを生かす

①

## NTTデータの戦略

2013年3月期にITベンダーとしてグローバルトップ5を目指すNTTデータ。グローバル化を進めるため、07年に買収したインドのバーテックスソフトウェア(ブネ市)と協力し、24時間の開発体制構築やグローバル人材の育成などを進めている。IT分野に強いインドのリソース(資源)を活用し、グローバル体質への変革を急ぐNTTデータの取り組みから、ITベンダーの生き残り方向性が見えてくる。

(土井俊)

「日本の顧客が品質重視に、米国の顧客はどれだけモノを早く作れるかというスピードを最も重視する」。日米の顧客の要求の違いにつ

発プロセスも理解する必要があるといえる。

親会社であるNTTデータは、若手社員に英語力やインド流の欧米向け開発手法などを学ばせるため、08年にバーテックスでの約2カ月間の研修制度を始めた。バーテックスは日本向けに加え、欧米向けシステム開発も手がけており、若手のグローバル志向を養うには最適な虎の穴だ。

研修では、海外拠点との連携に不可欠なビジネス英語のほか、実際にバ



NTTデータの社員と打ち合わせをするインド人の研修生

向けに開発スピードを重視するため、書類はなるべく使わない。その分「日本よりもPM(プロジェクトマネジャー)の手腕が問われる」と、研修生からは感嘆の声が漏れる。

また、グローバル開発体制の推進に必要となるのが、顧客企業の現場で開発にあたるオンサイトと、オフショア(海外委託)を組み合わせたシステム開発手法「グローバルバリーバリーモデル(GDM)」の定着化だ。

研修生の一人は「(インド研修で)常に時差を意識して取り組むようになった」と話す。24時間開発体制を軌道に乗せる上で、社員の意識改革は大きなメリットになる。

一方で「できれば、もっと長期で欧米案件に携わりたい」という声も。2週間の研修期間では、海外の開発手法を深掘りする(こと)までは難しかった様子。目標である「グローバルトップ5」を支える人材の育成に向け、より実践的な研修内容へとブラッシュアップし、継続できるかがカギとなりそうだ。

# 若手派遣 実践形式で研修

バーテックスの欧米企業向け開発プロジェクトにも加わり、インド流のプロシエクト管理や開発手法

を実践形式で学ぶ。日本の場合、開発作業はシステムの設計書や進捗レポートなど見当たら

ない。しかし、バーテックスの開発現場の机上には文書類がほとんど見当たら

ない。しかし、バーテックスの開発現場の机上には文書類がほとんど見当たら

ない。しかし、バーテックスの開発現場の机上には文書類がほとんど見当たら